

マリー・ヴィグマン 「現代の舞踊創作」¹⁾

Mary Wigman, « Tänzisches Schaffen der Gegenwart » (1926)

音楽家は創作のひらめきを書き留め、書かれた記号を補助手段や記憶の支えとしている。数百年も前から書物により伝えられてきた伝統は比較参照を可能にし、諸々の尺度と批判的な価値判断を生み出す。現代の音楽家がそのような伝統を幾千回と打ち破ってきたのであれば、音楽を奏でる者皆を貫く流れが存在し、それにより過去は現在、現在は未来と結びついている。

舞踊家とはいえば、寄る辺なくこの現代に立っている。唯一比較参照し得るものとしてはバレエが背後に横たわっているが、体験世界の総体が我々をそこから隔てている。バレエは我々の伝統ではあり得ないのだ。音楽が継続して姿を変え顔を替えながら、あつという間に過ぎ去る個々の時代の流れを内に取り込み自らの言語として血肉化してきた一方、バレエは自らが栄華を誇った時代、つまりロココ時代の表現と形式の中で立ち往生したままである。旧帝国ロシアバレエのスターたちが偉大な舞踊家であったからといって、それが我々にとって何になろう。パブロワの卓越した仕事の前に恭しく頭を垂れ、彼女の名人芸の輝きと心を掴む人格の魅力に驚嘆したところで、我々と彼女を結ぶ架け橋はどこにあるのか。ありはしない。彼女は独創性と時間形成力を持たないからだ。これら偉大なバレリーナたちは、その踊りにより今なお我々にロココ精神の残響を届けるため選りすぐられた楽器であったし、現在もそうである。けれどもこの楽器は現代に適した共鳴板を持ってはいない。彼女たちと私たちは違い、その踊りも私たちの中に生きてはいない。

我々はまだ出発地点にいる。これまでなし得たことは実験にとどまっている。舞踊を造形する形式がまず構築され、その形式が象徴になり最終的に解釈可能になるまで、実験の継続するプロセスの中で結晶化されねばならない。我々現代の舞踊家が所有するものは僅かだ。伝統も持たず、意味が明確で誰もが手に入れ理解できる舞踊記譜法も持たず、不可侵の象徴的意義を持つ確たる定型表現もない。けれどもこのように持たざることに、同時に我々の財産が含まれている。実験はまだ可能であり、探求、遊戯、想像の余地もある。舞踊の言語で言わ

れてしかるべき多くのことが、いまだ言い表されていないのだから。舞踊体験の領野は我々の前に広大に横たわり、時代も舞踊のために熟している。

自ら踊る者や踊りを共に体験し判断する者の間でさえ、舞踊の領域にはまだひどい混乱状態が支配している。魅力たっぷりの素人芸が真の業績と混同され、動く四肢を持ち場面に巧妙に配置された女達が舞踊家と呼ばれている。大まかにも細かくも区別そのものがなされない。第一級の音楽家たちは、自分の仕事が小洒落たカフェハウスの音楽と同レベルに置かれたら何と言うか。第一級の教会楽団は、偉大な指揮者に率いられた自身のコンサートプログラムが寄せ集め編成の器用なジャズオーケストラと並び称されたら怒らないであろうか。このような混同は、舞踊に置き換えてみると、いまだ連日起こっている。確かにレビュー、ヴァリエテ、カバレットは、舞台舞踊、室内舞踊、コンサート舞踊と同じ舞踊ではある。しかし舞踊の現象は様々なレベルで生じる。音楽もまた、そのための耳を持つ者には異なるやり方で存在している。いかなる耳も持たない人間は、自らに判断を許さない程度の教育しか受けていないのだ。舞踊を体験するという事は、目で受けとめ、身体とともに揺れることであり、そのためにはこの能力を備えた目が不可欠だ。音楽性を受けとめる耳を持たねば、音楽をいかに体験できるだろうか。だが我々は不平を述べるつもりはない。我々の仕事は、文句なしに敬意を受けたりするにはまだ若すぎる。我々は舞踊を求めて闘い行動することで、この表現芸術が今現在だけでなく未来を持つことも証明せねばならない。

ソロ舞踊と集団舞踊、二つの方向へと舞踊は影響力を表し始めるだろう。真剣に取り組まれるべき舞踊の仕事はすべて、一方では創作の才能、もう一方では完璧に仕上がった表現手段、つまり再現する才能を前提とする。真に創造的な才能、つまり偉大な創作者は、どこでも同じで稀にしか存在せず、教育により生み出されうるわけでもない。いるかいないかなのだ。平凡な才能はすべからず、卓越した楽器へと磨き上げられねばならない。作品を生み出し課題を立てるのは、創作の才に秀でた少数

1) [訳注] 翻訳に際しては以下を底本とした。Musikblätter des Anbruch. 8. Jg. Nr. 2. Feb. 1926. S. 95-97.

の者で十分だ。必要なのは、舞踊を維持促進し作品を上演するための作業場、そして舞踊の逸材に優れた業績への教育をほどこす一流の学校だ。仕事はまだ途上にある。

ルドルフ・フォン・ラバンの創造は、今日踊っている者皆にとっての基礎となる。彼は我々の内で最も影響力を持つ舞踊の提唱者と認められよう。休みなく絶え間なく変化しながら、彼の尽きせぬ想像力は、常に新しい形式をその内から投げかけてくる。彼は実りを実現する者ではないかも知れないが、種を蒔き育てる者ではあるだろう。舞踊の出来事が生成するあらゆる部分領域において、特定の意図を持った身体文化の企てから抽象的な舞踊の形式付与に至るまで、彼の影響はその跡を残している。疲れを知らぬエネルギーと鉄の粘り強さで彼は数年来、舞踊記譜法の基本原理を研究しているが、それは古のバレエの振付家たちの仕事のように人間の身体運動の外見上、形態上の現れを紙に写しとることが目的ではなく、運動の核、運動現象そのものを文字に閉じ込め書き留める試みなのである。それが成功すれば、舞踊の実験期との決別を意味するだろう。

真面目に舞踊と格闘する者の列に、私が自らの名を挙げることをお許しいただきたい。私はラバンを取り巻く専門家サークルの出で彼に多くを負い、そのおかげで後に独立し個としての形式で存在を主張し自らの権利を手

にしてきた。世間の抵抗と敵視にもかかわらず、まずはドイツ、そして外国で我々の舞踊への賛同を勝ち取ったのは、私のソリストとしての仕事の側面であった。舞踊家の職業訓練のために建てた学校（ウイグマン学校、ドレスデン）は、私の舞踊家の使命の一部をなしている。極めて小規模から始まって成長し、この学校は今日舞踊家の方法を開発する中心地となった。教育的才能を持ったエリザベート・ヴィグマン、音楽家で舞踊作曲家のヴィル・ゲッツェ、第一級の舞踊家であるハンヤ・ホルムとヴィ・マギトは、この活力に溢れた作業所の指導者かつ共同責任者として仕事をしている。私の個人的舞踊の影響の三つ目にして最後の側面は、マリー・ヴィグマン舞踊団である。この設立以来の三年間で、団は二つの大規模な作品を生み出した。「舞踊劇の光景」では、シンプルな舞踊のテーマを九通りに変奏し、ソリストは集団と対置される。「舞踊メルヘン」は、集団の舞踊素材から枝葉をつけていった、一貫する筋を持つ遊びに満ちた寓話である。三つ目の作品として、今年の春、三部構成の組曲が生み出され、その中では主なアクセントは「死の舞踏」に置かれるだろう。純粋な舞踊現象は、ヴィル・ゲッツェに率いられたアンサンブルのメンバーによる律動的な打楽器の伴奏に引き立てられることだろう。

（訳：古後奈緒子）